

ミネソタ州「環境リテラシーの学習内容と順序」 に基づく日本の環境教育プログラムの検証

太田 久美子

キーワード：環境教育，環境教育プログラム，ミネソタ州「環境リテラシーの学習内容と順序」

1. 背景と目的

近年，環境教育推進法の制定，教育基本法や学校教育法の改正，学習指導要領での環境教育に関する内容の増加に伴い，環境教育の重要性はますます高まってきた。しかし，現在の環境教育は，内容が系統的でない，学年ごとの指導目安が確立されていない，環境問題に対するホリスティックなアプローチや批判的思考過程，社会システムへの視点の欠落という問題を抱えている。このような課題の解決には，環境教育を体系化し，各発達段階での環境教育のねらいと目標を関連づけたフレームワークを示し，環境を系統的に捉えたプログラムの作成が必要である。そのため，既存の環境教育プログラムのねらいや目標を構築している概念におけるホリスティックな視点，つまり自然，社会システム・自然と社会の相互作用で捉える視点の存在を検証する必要がある。本研究では，現在の日本の環境教育プログラムを形成する概念を分析・整理し，学習者の発達段階に応じた環境教育に必要な概念を基に日本における環境教育プログラムを検証することを目的とする。

2. 方法

本研究では，ミネソタ州「環境リテラシーの学習内容と順序」の中で，環境リテラシーを身に付けるために学ぶべきとされている自然・社会システムを捉える 59 の概念を基に日本の環境教育プログラムを分析した。「環境リテラシーの学習内容と順序」は，自然と社会システムとの相互関係についてどのように教えていくのか，ミネソタ州における幼児から成人に至る環境教育の学習ステップを，システムアプローチに基づいて構築されたものである。分析方法として，プログラムにおける学習者の活動内容と各活動より学習者が学ぶ内容とを順に線で繋ぎ，学んだ内容と関係する概念を導き出し，コンセプトマップを作製した。その後，導き出した概念について，自然システム，社会システム，自然・社会の相互作用に適用されているか，単に概念の定義を提示しただけのものであるかについて検討した。

3. 結果と考察

分析の結果，日本の環境教育プログラムに含まれる概念や自然，社会システム，自然と社会の相互作用の視点の有無が明らかとなった。低・中学年のプログラムは，自然に親しむ，遊び，観察が多く，自然と触れ合うことに重点を置いており，自然や社会の単一システムとそれらの部分や関係には焦点を当てていなかった。一方で日本のプログラムは，ミネソタにおいては小学6年生以上から学ぶような概念を含んでいるゴミやエネルギー問題を中学年から扱っていたが，概念の定義を提示しただけで，系統的にそれらの問題を捉えていなかった。高学年では，自然や社会システムに関する概念を学ぶ機会が比較的増しているが，その原因となっているのは，地球温暖化やゴミ問題を扱うプログラムの存在であった。しかし，このような都市型問題に焦点を当てたプログラムの多くは，自然や社会を系統的に捉えた解決策を提案するのではなく，個人の行動を振り返ることを勧められているため，個人の問題に収斂し，道徳的な要素が強かった。

以上のように，具体的な環境教育プログラムの検討から，日本の小～高学年におけるすべての段階において，社会系統的視点の欠落や，環境問題の解決策を系統的に捉える視点が乏しいことが示された。また，小学校の環境教育においては，自然システムにおける生物同士の関わりにあまり目が向けられていないことが明らかとなった。今後，日本においても発達段階別に身に付けるべき概念を提示したフレームワークの構築や低学年から自然・社会の単一システムを意識した構成のプログラムを作成することが望まれる。